

ほなひ歴史通信

第96号

2020(令和2).9.1

感染症と生きる人々

人生生活ノ上ニ於テ最モ注意ヲ要スヘキモノハ衛生ニシテ
又最モ恐ルヘキモノハ伝染病ナリトス

これは、今から百年以上前の大正三年(一九一四)に作成された「大子町々是調査書」(『大子町史 資料編 下巻 近現代』所収)に記された言葉です。新型コロナウイルスの流行下にある私たちにあって、重く響く言葉ではないでしょうか。この言葉が記されてから間もない同七年、世界中でインフルエンザ(スペイン風邪)が大流行します。この時、大子地域はどのような状況にあったのか、紹介したいと思います。

大正七年三月にアメリカで発症が確認されたスペイン風邪は、第一次世界大戦の最中であつた各国へと拡大していきます。やがて日本にも上陸し、十月頃に大流行を迎えます。十一月八日の『いはらき』新聞記事には、「久慈郡学校 続々休校」との見出しで、久慈郡地域の流行を伝えています。この当時の休校は、現在のよな国の指示によるものではなく、あまりに感染者が多いため、授業が成り立たないことから行われたものであつたようです。同月十一日には、依上村の併置校が「流行性感冒」(スペイン風邪)のために二日間程休校となっております。

十一月十一日の頃には、大子地域でも感染は拡大していました

が、死者は僅かに一名だけでした。しかし、感染は止まらず、拡大し続けます。

大子町地方に於ける流行性感冒は、最初児童間に多く猖獗を極めたるが、本月中旬頃より病勢次第に中年の者に感染する傾向あり、各地方部落落何れも数十人の患者を見るに至り、死亡者十余名に達したりと(読点を加筆引用者)

これは、十一月二十二日の『いはらき』新聞記事です。わずか十日程で死者は十数名へと急増しています。また、大子地域では児童を中心に広がっていた感染が、次第に中年層に向けて拡大していったことが判明します。幸い、このスペイン風邪第一波と呼ばれる感染拡大は、翌八年になると落ち着き、二月十九日の『いはらき』新聞記事には、「久慈感冒終息」の見出しが見られます。

このスペイン風邪第一波による大子地方の死者数はよくわかっていませんが、宮川村・上小川村の「事蹟簿」によると、大正七年から翌八年にかけての「流行性感冒」による死者は、それぞれ一三人、二三人と多数記録されています。ここから考えると、大子地域でも相当な数の死者が発生したのではないのでしょうか。スペイン風邪第一波による茨城県内の感染者数は、久慈郡が圧倒的に多かつたようです。『いはらき』新聞の記事(大正八年一月十五日)によると、大正七年十月・十一月の感冒感染者数は、全県で二万二四一四人。その内、久慈郡の感染者は、四万四五三九人で全県の二〇パーセント近くに及びました。

コロナ禍で先が見えない現在ですが、百年程前の人々の姿は、不安と戦う私たちの力になるかのようです。当時の感染症対策の様子は、『大子町史 通史編 下巻』(三三九〜三四九ページ)にも書かれていますので、関心のある方は手に取ってみてください。

(藤井達也)

ご縁を感じる大子町（上）

赤地靖士

ご縁があつて、数年前から『ほない歴史通信』を毎号楽しみに拝読しています。大子町が身近な存在になるなか、考えてみますと、私と大子町の間には他にもいくつかのご縁があるようにも感じられましたので、その一端を綴つてみたいと思います。

大子町とのご縁は、昭和二十七年（一九五二）、当時通学していた河和田村（現水戸市）の小学校六年春の遠足で、袋田の滝へ行つたことが始まりです。水郡線を袋田駅で降り、駅から滝までは徒歩だったと思います。滝川の淵は今のように入備されておらず、滝壺に近づくにつれ大きな岩がゴロゴロころがっているまさに岩場のようなゆるやかな坂道、そこに取り付けられた鎖につかまりながら進みました。目的の滝は、上方から水が流れ落ちるととても大きな滝で、高くて見えないその先はどうなっているのかなあと思いながらずっとずっと見ていたかった、そんな記憶があります。

二つ目のご縁は、貝沼スケート場です。郵便局に就職して一年目の冬、確か昭和三十五年の一月か二月のこと。この頃若者の間でスケートがブームになりました。私も職場（多賀郵便局）の先輩に誘われ、土曜、日曜には若い男四、五人で水戸駅前から貝沼スケート場まで直行のバスに乗り、通つたものです。

その頃のバスは今のようないワンマンバスではなく、車掌が同乗して車内で切符を発行しました。ある時、バスはいつもながらのギューギュー詰め、ドアをやつと閉めての出発でしたが、無賃乗車を初めて経験しました。今でもよく覚えています。何故こうなつたか、この日は出発時間ギリギリの駆け込み乗車で小銭を用意できなかったこと、小銭がないため降りる際に千円札を出したところ、車掌はそれを見て「今日はこのまま降りていいよ」となつ

た次第です。とにかく混雑の中、釣銭を数えて渡す余裕もなかったのだと思います。車掌さんの大様なところも感じられ、何かいい時代であつたような気もします。もちろん、これ以後は小銭を用意し、同じことがないようにしました。

バス停からは五分とかからなかつたと思いますが、大勢の若者がスケート場まで急いだものでした。初心者の分際でありながら、私はスピード用の靴をもっていたので気分はいつも意気揚々。と言つてもスイスイと滑れるわけでもなく、両足をハの字に開き、いつでも止まれる用意をしながらの何ともおぼつかない格好で滑っていたように思います。それでもリンクが混んでいない時は多少スピードを出し、コーナーリンクをうまく回れた時はやつたと思いましたが、直線に出てから転倒することもしばしばでした。

何せ、一日でも早く上達したいとの一心で貝沼スケート場には通つたものです。シーズン中は月に二、三回、三年間ほどは行つたでしょうか。この間、少しずつですがうまく滑れるようになっていくのが実感でき、嬉しかつたことを覚えています。リンクで滑っている同世代の若者の中にはカップルもいて、お互いに支え合いながら滑っているのを見て、何とも楽しそうでいいなあと思つたこともありましたが、私の場合はそうした経験もなく、その点ちよつと残念です。

本稿を準備するため当時を思い起こしたり、妻ともいろいろ話をしましたが、何と同時頃、高校二年生だった妻も休日を利用して友達数人と水戸から貝沼スケート場へ行つていたことが分かりました。現在放映中のNHK朝ドラの「エール」ではありませんが、ひよつとしたらスケート場で出会っていたかとも思うと、不思議な思いもしますし、何やら面映ゆくもなります。ちなみに私は見合い結婚です。当時の『いはらき』新聞をみると、県内各地から多くの若者が大子町に駆け付けスケートを楽しんでいました。私も妻も、その一人だつたことになりました。

（水戸市在住）

国勢調査百年に寄せて

大金祐介

今年は、国勢調査の年である。そして、ほとんど知られていないが、大正九年（一九二〇）に初めて国勢調査が実施されてから百年という節目の年でもある。節目の年を迎えるにあたり、百年前を回顧し、第一回国勢調査が実施された時の保内郷の様子を見ていきたい。

国勢調査は、人口や世帯に関する全数調査である。明治初期からその必要性は訴えられていたが、紆余曲折を経て、大正九年にようやく実施された。同年の第一回国勢調査は、国勢院の主導のもと、約二六万人の調査員がこれにあたった。調査員は、いわゆる地方名望家や学校教員などが務めた。大子町では、後に県会議員となる川口利吉や後に大子町長となる永瀬三四郎などが調査員を務めた。調査方法は、各世帯に国勢調査申告書を配布し、これに大正九年十月一日午前零時時点の世帯構成員の氏名、性別、生年月日、職業などの八項目を記入させ、回収した後、集計するというものだった。現在とは異なり、十月一日午前零時時点の居場所調査されたため、旅行者は旅行先の人口に数えられた。

第一回国勢調査が実施された十月一日は、全国的に大雨だった。時の大子町長益子彦五郎の回顧録「最近大子記事第一号并二余町長ノ事績」によると、保内郷では、九月三十日から雨が降り始め、十月一日午前一時頃にピークに達した。河川はもちろん山沢までもが氾濫し、各所で建物の流失や浸水、土砂崩れが発生し、死傷者がでた。甚大な被害だった。益子は、回顧録に、水害の影響で「各戸ノ人々散乱シ住宅ニ居ラズ、調査委員困難セリ」と記しており、調査員は水害の発生により困難を強いられたことが伺える。

大子区長の大金喜平に至っては、区長在職のまま調査員を務め

たため、水害対応に追われながら国勢調査にあたることを余儀なくされた。

第一回国勢調査の結果、我が国の人口は、約五五九六万人であると判明した。それまでの戸籍に基づく統計と比べて約一九六万人も少なかった。この誤差は当時の茨城県の人口（約一三五万人）よりも大きく、国勢調査の重要性が確認された。

保内郷における第一回国勢調査の結果は、左の表のとおりである。保内郷で最も人口が多かったのは、大子町だった。当時の大子町には、保内郷では他に類を見ない大規模な市街地が形成されており、保内郷の中心地とされていた。二番目に人口が多かったのは、黒沢村だった。保内郷の中でも特に山間に位置する黒沢村が大子町に次いで人口が多かったことに驚く方もいるかもしれないが、当時の同村は林業が非常に盛んだったことから人口が集積していた。この結果には、隔世の感を感じずにはいられない。

最後になるが、総務省統計局が「国勢調査 100 年のあゆみ」(URL: <https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2020/ayumi/>)というホームページを開設しているので、国勢調査の歴史に関心のある方は、ぜひご覧になって頂きたい。(大子町大子在住)

保内郷 1 町 9 か村の世帯及び人口

	町村名	世帯	人口
1	大子町	1,059	4,873
2	黒沢村	858	4,172
3	生瀬村	873	4,093
4	上小川村	707	3,816
5	依上村	675	3,122
6	袋田村	615	3,057
7	諸富野村	634	2,957
8	下小川村	614	2,944
9	佐原村	600	2,878
10	宮川村	582	2,858
	合計	7,217	34,770

内閣統計局『大正九年国勢調査報告』より作成

大子町の新発見城郭その四
 頃藤地区の二つの城館跡について

五十嵐雄大

頃藤地区には、頃藤城と頃藤古館という二つの城館跡が知られています。これら二つの城館跡は、遺構が今でもよく残っています。これら以外にも頃藤地区には城館跡があります。一つは、仮称・頃藤要害城、もう一つは、仮称・頃藤天道山砦です。頃藤要害城は字金山にあり、頃藤城から久慈川を挟んだ東側の山上にあります。遺構は、山上に郭が五段あり、北側の尾根伝いに深さ二メートルの堀切があります。堀切より一〇メートル先に道標を兼ねた石造物があります。ここには長福寺から山際を伝い、東側の沢へ下る道があります。この道は石造物の存在から江戸時代には道として使われていたようです。この城は、この道の管理と頃藤城の死角をカバーする目的があつたと思います。また、字金山とあることから金山管理の可能性もあります。

頃藤天道山砦は、大子特別支援学校の東側の山にあります。山上に天道様という祠があり、北側に三段の郭と堀切・堅堀が残っています。特に堅堀は幅最大一五メートル、高低差一〇〇メートルある立派なものです。この遺跡は、頃藤宿から長福山へ抜ける山道沿いにあります。中世では長福山に向かうには、尾根沿いを進んだと考えられます。堅堀は尾根の移動を制限するために築かれたと思われる。そこからこの城跡は、長福山道の管理を目的としていたのではないかと思われます。

頃藤地区の四つの城跡を示したのが下の図です。街道や河岸跡など戦略上の要衝に城が築かれていることがわかります。頃藤宿は、城跡に挟まれるような形で展開していて、町内で確実に中世にまで遡ることができる集落といえます。(茨城城郭研究会)

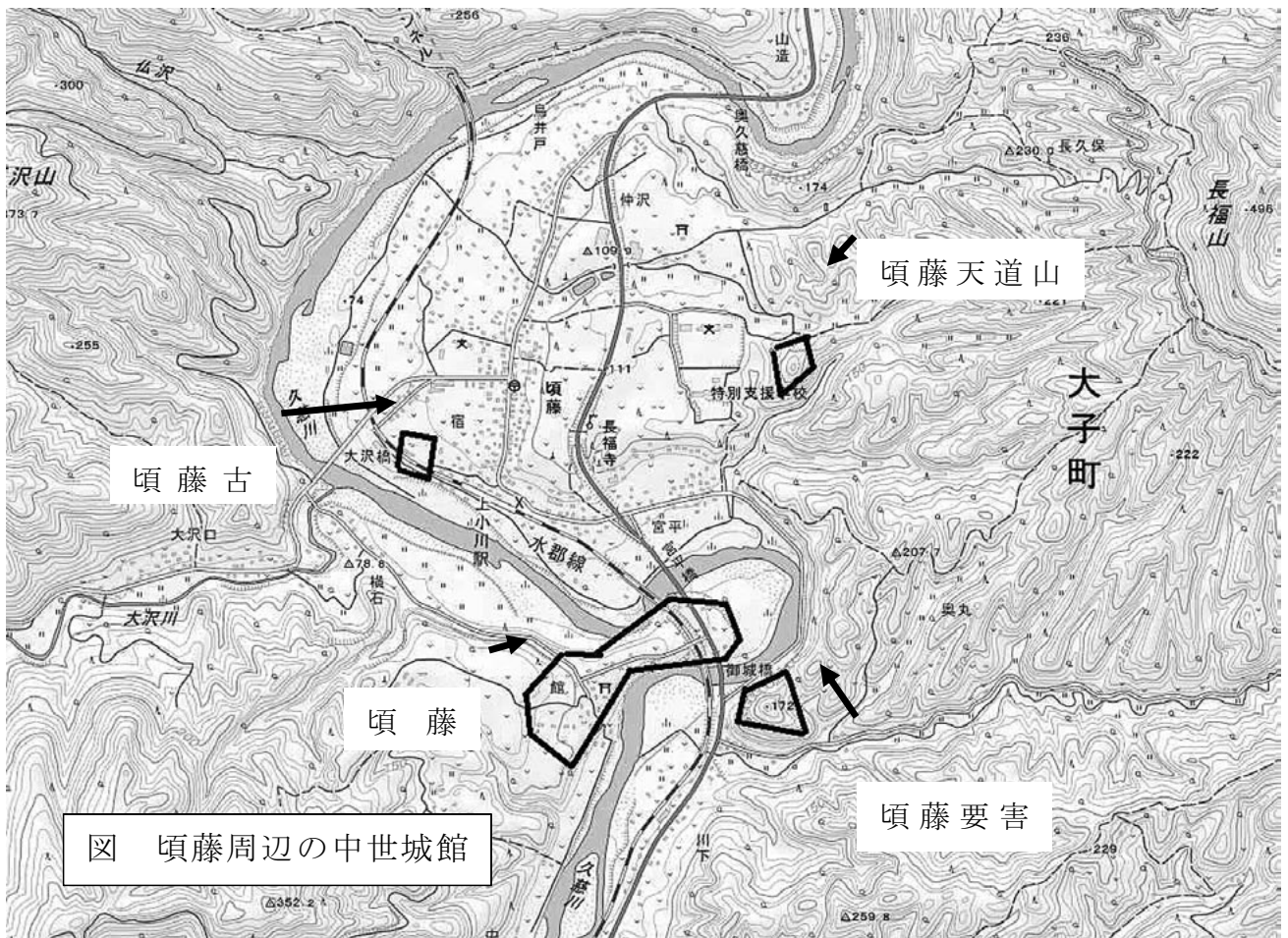


図 頃藤周辺の中世城館

『遠ざかる昭和の記憶』に寄せて

先崎千尋
まつさきちひろ

大子町の菊池国夫さんから『遠ざかる昭和の記憶』(二〇一九年刊)をいただいた。菊池さんは郵便局勤務ののち、脳性小児麻痺を患っていた息子の盛昌さんの介助をしながら、大子町の地名や方言、訛りなどを調べ、それぞれ本にまとめている(『奥久慈・大子町の地名』、『奥久慈大子町の方言と訛』)。

今回の著作は、菊池さんがこれまで日立市のタウン誌『スペースマガジン』と地元ローカル紙『大子ジャーナル』に連載した記事をまとめたもので、一頁に一つのテーマ、全体で三百を超える。著者の身近なこと、息子のことやおはこの大子の地名、歴史から千島列島などの領海権、原発など万般にわたる。著者の日頃のアンテナの高さがうかがい知れる。そういうことがあったんだとか、知らないことに気づかされるとか、学ぶことが多い。

その中に、気になる記事がある。「戦後の思い出」というタイトルのところに、『大子町史』編纂にまつわる話が出てくる。一九五三年(昭和二十八)に『存在』という同人雑誌が発刊された。それを菊池さんが編纂委員の一人に貸した。しかしその後なんの問い合わせもなかった。しばらくして発行された『大子町史 通史編 下巻』を見ると、『存在』の創刊に骨を折った人たちの名前が出ていなかった。それを見た菊池さんは、創刊時の関係者間には「大いなる不信感だけが残った。歴史としての記録であるからには、もっと細やかな神経を使って欲しかった」と書いている。同『町史』には、「創刊当時の同人は、川野辺弘、枝三郎(以下略)等」とあり、「臼井博、古沢慎也、会田八郎」さんらが書かれていない。資料を提供した菊池さんの名前も記載されていない。

菊池さんは、勤務先の大子郵便局が一九七四年に開局百年を迎えたので、『おらが局』という記念誌を作成した。これを読むと、郵便局の業務は郵便、電信電話、貯金、保険と地域の人々の暮らしに密着していたことがわかる。今では電報は滅多に見ないが、電話が普及していなかった時代には重要な伝達手段だった。雪の夜の電報配達が大変だったことなど、今では想像できないことだ。著者は、大子町に残る方言や地名に縄文時代の痕跡が残っていることを、二冊の著作で克明、丁寧に示している。この著作は『町史』発刊のあとの出版だが、地元ではどのように受け止められているのだろうか。

戦後まもない一九四七年六月、大子小学校で「中日版画展」が開かれた。これを機に、同町に無名の若者たちによる版画や詩のサークルが生まれ、奥久慈版画会は同年十月に「全日本新木刻運動会議 木刻まつり」を誘致した。このまつりは三日間開かれ、下館の飯野農夫也ら全国の版画家たちが集まった。「戦後の版画芸術の歴史は大子をもって始めとする」(中日文化研究所・菊池弘理事長)とまで言われている。

この歴史をふり返ろうと、二〇一二年五月に大子・街かど美術館で「野に叫ぶ 飯野農夫也と奥久慈版画展―戦後復興と地方からの文化発信―」が開かれた。菊池さんは二〇〇〇年に、「野に叫んだ人々の声は、やがて野に埋もれて消えていくのが歴史であるとすれば、たとえささやかではあっても、それらを後世に残そうと努力することも、今に残る我々の務め」と書いている。

菊池さんの本にも出てくるが、現在の大子町域は中世末期までは「依上保」、その後「保内郷」と呼ばれ、陸奥国白河郡に属していた。『大子町史』には、北、東、西の境界ははっきりしているが、その南すなわち常陸国との境界がよくわからない、とある。現在、常陸大宮市で市史編纂事業が進められている。その中で境界が解明されることを期待している。(那珂市在住)

大生瀬打越地区の「御数珠廻し」

齋藤仁司

「御数珠廻し」は、打越地区に続いている民俗行事で、毎年六月二十八日前後の日曜日午後三時から、今は主に大生瀬集会所で開催される。講中は現在一〇名で構成され、順番が定められた当番(宿)が年々交代する。当番は準備から実施までの全てを担当し、古くは、当番宅で行っていたため宿(やど)とも呼んでいる。行事が終わると次の当番宅に引き継ぐ。

集会所(以前は当番宅)に集うと挨拶の後、まず木箱に収められた御数珠に線香を上げて祈禱する。講中全員がそろった所で木箱から御数珠を取り出し、全員が丸く座って両手で御数珠を持ち、廻し始める。御数珠の大王は当番から廻し始め、各自が大王を手にした時に願いを込めて一札する。そして七回半廻して、大王が最初の当番に戻ったら終了である。木箱に収めた後、皆で会食をし、懇談する。この御数珠は次の当番が一年間保管する。古くは講中も多く、御数珠を各家々に回して、家族の無病息災を祈願したそうだが、今はやっていない。このような「御数珠廻し」は各地にあつたらしいが、今でも伝承しているのは少数派らしい。

御数珠を収めている木箱は、厚さ約1cmの檜板製で、縦二〇・八cm、横八八cm、高さ二四cm、蓋は、二三cm、九一cm、八cmである。蓋には、「大正五年六月二十八日調製 齋藤〇〇〇筆」と裏書があり、箱横には、調製時の寄付者名と金銭が墨書されている。拾銭、八銭、五銭、参銭の下に二〇名の氏名が記されている。最後に「次第不同打越坪中」と書かれている。

御数珠は大小五〇七個の玉が麻縄で結ばれてできており、玉の内訳は、桐製の親玉一個、柘製の小玉四九九個、一回り小さい小玉七個である。先人からの伝えでは、この小玉は、各家庭の人が

皆で一個ずつ削って持ち寄ったので大きさがまちまちでそろっていないのだという。

なお、令和二年(二〇二〇)の「御数珠廻し」は、新型コロナウイルス感染予防のため延期している。

「御数珠廻し記録簿昭和五十一年六月二十八日打越坪(日向・北向)」の記載を見てみよう。

御数珠廻し

当番順序左記の通りとす 昭和五十一年六月二十八日

記

(一頁目に九名、二頁目に一名の氏名の記載があるが省略)内申し合せ事項

一、□前は、当番順になっているが、判読できないので当番順を作成した。順番(当番)にする場合もあり得ること。

二、会費は現時点一戸当式百円と定める。

三、手着持参のこと。

四、会合時刻は午前拾時とす。

五、引続(継)については、□世話人が言い渡すこと。

六、当番の指示等は、□世話人が知らせ、その他の行事のことは、組員(一戸□)の意見を聞き、その任に当る。

以上、昭和五十一年六月二十八日

皆様(打越)の話し合いで決定

当番(齋藤〇〇氏宅)

当日の出席者 全員出席二〇名 欠席者なし

この後も、開催時間や会費、肴の持参の件などの改正を重ねて大生瀬打越地区の「御数珠廻し」は今日まで存続している。

注 ○印は個人情報のため省略した箇所、□印は判読不明な文字を示す。(大子町大生瀬在住)

産地づくりに向けた公的支援の展開（下の六）

―特産品・りんごのルーツを探る（二五）―

昭和三十年代後半から四十年代にかけて行われた大子町の支援策は、「りんご栽培の本命」と位置づけた病害虫防除に重点が置かれていた。各種の防除機器類や使用する薬剤等への補助がその内容であるが、とくに前者、例えば人力式背負噴霧器、動力式噴霧器、スピードスプレーヤー（以下SSと略）等の導入補助については、これまで三回にわたって本誌で述べた通りである。一年ごとに確実に生長していく樹木、広がる樹園地面積に対応すべく、また防除作業の効率化をはかるために用いる防除機器類も移り変わっていった。ただ、SSに行き着く前にもう一つ別の防除方式への助成が行われていた。定置配管施設がそれである。町の「決算に関する附属資料」等によると、昭和四十一年度と四十二年度の二年間、それぞれ二〇万円が定置配管施設補助に充てられている。この定置配管とはどのような施設なのであろうか。

業者と共に自らもその施工にあたったという木澤源一郎さんによると、動力式噴霧器の場合、調合した薬液を貯留したタンクから百メートルほどのホースを引張って樹園地内に散布したが、一人はホースの引張り役、もう一人は散布役の二人掛りで大変な労力がかかったという。樹園地が広がるほど労力はかさんだ。こうした労力を軽減するために設けられたのが定置配管施設である。木澤さんの場合、地下六〇〜七〇センチの深さに溝を掘って内径一三ミリの塩ビ管を埋設し、三〇メートル見当の間隔で地上に出る立上りを設けて蛇口を取り付けた。その結果、蛇口に一〇〜二〇メートルの短いホースをつなげれば一人で散布でき、蛇口は何か所にもあるから二人なら同時に散布が可能になるので労力的には「ずっと楽になりました」と語っている。この定置配管工

事は昭和四十年（一九六五）三月に終わったが、生瀬地区をはじめ他の多くの生産者はすでに施工済みで「私は遅い方」だったともいう。木澤さんは、四十二年には隣接する二人の生産者を誘って補助を申請し、資材費の半額の補助を受けて施工している。

確かに、定置配管施設は労力の軽減に寄与したが、ホースを手にもって散布することに変わりはない。そのため散布に二日も三日もかかり、防除の効果を最大にするための三原則の一つである「適期」からはずれてしまうことも生じる。また作業環境の面でも、ビニールの合羽を着てマスクや手袋を装着しての完全防備での散布作業なので、とくに夏の時期には暑くて長時間の作業は不可能となる。こうしたある種の限界は解消せず、定置配管方式でも「間に合わなくなつて」（木澤氏談）SSの導入へと移っていくことになる。

木澤さんの場合、この方式の活用は五年間ほどであり、昭和四十五年からは町の補助を受けて西部地区に導入されたSSを利用することになる。なお、平坦地ではこの切り替えが無難に進んだが、SSの稼働が危険を伴うような急傾斜地、例えば西金地区ではしばらくは定置配管方式が継続したようである。

SSの導入は、昭和三十七年の東部地区（生瀬地区）が初めてのケースであったが（本誌第九三号参照）、その後四十四年度に町から三〇万円の補助を受けて北部地区に、翌四十五年度に同じく五〇万円の補助を受けて西部地区に導入された。だが西部地区のSSは、不運にも使用開始後ほどなくして事故のため使用不能となつてしまった。関係者の努力により四十六年度に再び補助金再申請の運びとなり、町から五〇万円の支給を得て二台目の導入が実現した。かくして病害虫の防除を重視する町の公的支援（茨城県からの補助も含む）のもと、大子地域の防除の方法は、生産者から「画期」あるいは「革命的」（本誌第九三号参照）とも称されるSSを軸にした時代に移行していくのである。

（齋藤典生）

大子の今昔 写真帳

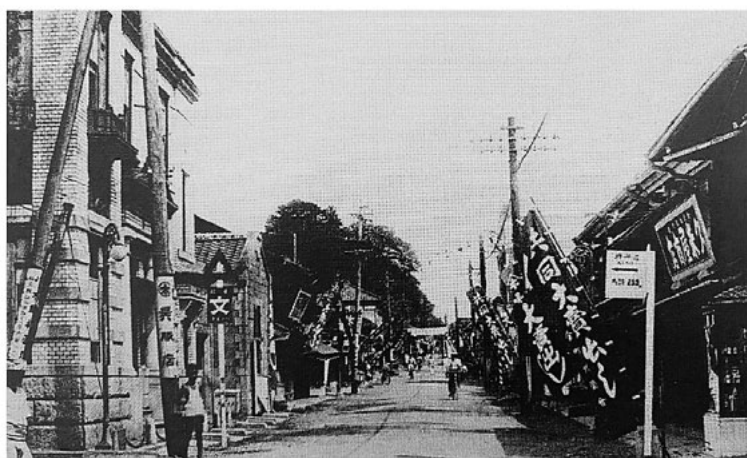
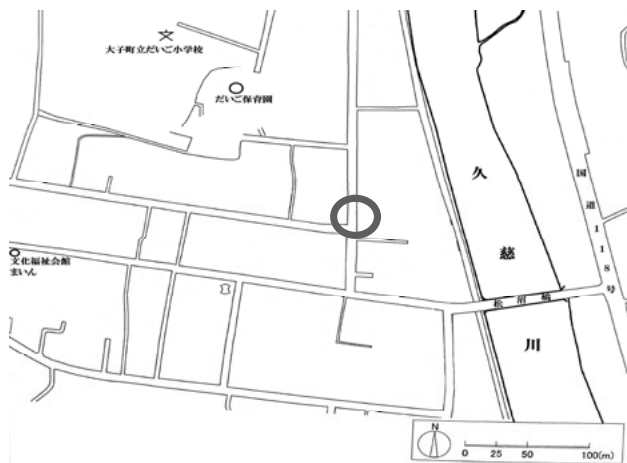
No.4

金町通り

金町通りと本町通りの交差点から金町通りを北に向かって写した写真。

左側の建物は、大正6年に建てられた大子銀行（昭和10年7月からは常陽銀行大子支店）であり、現在は、まちかど美術館となっている。また、右側には外池呉服店の建物が見え、現在は漆器を取り扱う店舗の器而庵（きじあん）として利用されている。

（大金真理子）



昭和10年ごろ

金町通り（絵葉書「大子名勝 大子金町通ノ景」より）



現在

発行日	発行	編集
令和二年（二〇二〇）九月一日	大子町教育委員会 大子町中央公民館内 久慈郡大子町大字池田二六六九番地	大子町歴史資料調査研究会 齋藤 典生（大子町歴史資料調査研究員） 井上 和司（大子町歴史資料調査研究員） 藤井 達也（大子町歴史資料調査研究員） 藤田 貴則（大子町教育委員会事務局） 神長 敏（大子町教育委員会事務局）